

コンスタンティヌスとキリスト教

——対マクセンティウス戦を中心に——

序

五三〇年頃の書とされる『教皇の書 Liber Pontificalis』のシルヴェステルの項目によるとコンスタンティヌスはキリスト教への改宗のあとローマ市にコンスタンティヌスのバシリカ（今日のサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂）、聖ペテロ教会（今日のサン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ大聖堂）、聖パウロ教会（今日のサン・パウロ・フォリ・レ・ムーラ大聖堂）を含む七つの大小の教会を建設したと記されている⁽¹⁾。しかし同書はコンスタンティヌスの改宗・回心の動機を、神罰として受けた病氣（レプラと言われている）を洗礼によって癒してくれたキリストと司教シルヴェステルへの感謝と結びつけているので、教会の献堂もその報恩行為であったかのような叙述となっている⁽²⁾。一方、教会史の権威エウセビオスはその『コンスタンティヌスの生涯』の中でコンスタンティヌスがコンスタンティノープル、エルサレム、ベツレヘム、ニコメディア、アンティオキアなどに建設した教会に言及しながらローマ市の教会には全く触れていない。このようなこともあり、コンスタンティヌスがローマ市に建てた教会

新 田 一 郎

については確実性が弱いとされてきた。しかし近年の考古学上の調査によりラテラーノ教会と聖ペテロ教会はコンスタンティヌスの治世に、聖パウロ教会は息子コンスタンティウス二世の時代の完成ながらコンスタンティヌスも係わったことが判明している⁽⁴⁾。私はこの成果を踏まえコンスタンティヌスが三一九年末ないし三二〇年初頭には完成させたと思われる「コンスタンティヌスのバシリカ」⁽⁵⁾通称ラテラーノ教会の建設の動機とその経緯、及び三二五年建設のコンスタンティヌスの凱旋門を中心に彼のキリスト及びキリスト教との結びつきについて考察していきたい。内容は次の三章構成とし、これに結語を加える。

- (一) アウグストゥスとコンスタンティヌス
 - (二) ラテラーノ教会をめぐる問題
 - (三) コンスタンティヌスの凱旋門をめぐる問題
- 結 語

一

アウグストゥスとコンスタンティヌスの二人をある共通のレベルにおいて比較しつつ、両者の類似点を指摘する研究者は欧米には殆どい

ない。欧米の研究者は伝統的にコンスタンティヌスをローマ史よりもビザンツ史との係わりから、また古代ローマ世界よりも中世キリスト教世界との係わりから理解しようとする立場に立っている。例えばケンブリッジ中世史は三三〇年のコンスタンティノーブル遷都ないし三二五年のニケア公会議から叙述を始めている。コンスタンティヌス（以下C帝と略記）以降キリスト教が宗教の分野に限らず、他のあらゆる分野に深甚な影響力を与えていることを考慮するとこの立場には整合性がある。

しかしアウグストゥスとC帝との間には興味ある類似点が見うけられる。特に見過ごし得ぬ点は両者が対外的に華々しい成果を挙げた、と言うより相次ぐ内戦・党派争いを終結させローマの平和を回復したと言うことである。アウグストゥスの場合について言えば、対外戦での勝利、属州の拡大はJ・カエサルの下ではほぼ完了していた。彼が為したことと言えばカエサルの暗殺により再度出現した内部対立に終止符を打ち、帝国に平和状態を導入した点にある。「アウグストゥスの平和」Pax augusta がこれであり、以後この状態は二世紀の優れた皇帝達の登場により一層磨きがかけられ、E・ギボンの言う「人類史上、最も幸福にして繁栄せる時代」⁶⁾が到来する。

一方C帝の場合、対外的勝利は彼の父コンスタンティウス一世もその構成員の一人であったディオクレティアヌスの四分治制の時代にひと先ず終了していた。C帝の仕事と言えば対外戦もさることながら四分治制の体制の維持が困難となり、皇帝乱立状態を招いた時代において対立皇帝を次々と打倒し、一人支配を確立したことがある。それはアウグストゥスの場合と同じく覇権をめぐる党派争いの中での成果で

あった。ここに大きな共通点がある。

類似点はこれだけに留まらない。更に重要なことは両者とも自らの戦いの目的を「専制の打倒」「自由の回復」に置き、ローマ人の共感を強く呼び込んでいることである。以下この点の考察に移るが、この考察に先立ち、先ずローマ人の戦争観について理解する必要がある。ローマ人の戦争観はヘブライ人とギリシア人の戦争観の中間に位置づけられるであろう。神の選民をもって自認するヘブライ人にとって相手国との共存はあり得ない。相手国は抹殺か駆逐の対象となる。ギリシア人にとって戦争は数百を数えるポリス相互間の覇権争いであり、その戦いは戦争よりもスポーツ競技を主とする型をとる。従って戦いは一騎打ないしルール尊重のスポーツ型争いとなり、相手国との共存がむしろ大前提となる。これに対しローマ人の戦いは自国民のみならず同盟国の住民の安全を守るための闘争であるだけでなく、講和の締結によって相手国との共存を目指すものであった。これは数百年をかけて創り挙げたイタリア半島の統一のプロセスの中で体得したローマ人の知恵と言うべきものであった。ローマ人は単なる征服戦争によってではなく戦争―講和―和解のプロセスの中で相手国を併合・一体化させつつ拡大していった国であったことに注目すべきである。

しかしこの相手国の打倒・抹殺ではなく、講和・和解・一体化を目指すローマ人の戦争方式は相手国がローマと同等ないしローマを凌駕する文明国である場合において成立するものであった。従って戦争の相手が野蛮人・盗賊・海賊あるいは蜂起奴隷となると話は別となる。ローマ人にとって彼らとの講和・和解はありえず、彼らは抹殺ないし駆逐の対象となっていく。特に共和制末期イタリアで発生した奴隷反

乱は人類に敵対する犯罪行為とされた。ローマ人にとってそれは正規の戦争の範疇に入るものではなかった。⁽⁷⁾

ところでこの正規の戦争に入らずそれ以上に在ってはならぬ恥ずべき戦争とローマ人が見做した形式の戦争に内戦・党派争い・内輪争いがあった。自国民の安全だけでなく同盟国の安全の為に戦うことをモットーとするローマ人にとってそれは当然のことであった。しかし前述の如くアウグストゥスもC帝もこの内戦・党派争いの勝者でありながら名声を得、更に恩恵者・救済者として崇敬もされている。むしろ彼らが分裂状態にある祖国に、統一と平和、秩序と安全を回復した功績は大きい。しかし両者が戦った戦争は対パルティア戦そして対ササン朝ペルシア戦という対外戦争ではなかった。アウグストゥスはこのことを強く意識していた。当時のローマ人にとって大義名分の立つ戦争は対パルティア戦であった。なぜならそれはクラッススの敗北に対する弔い合戦であり、カエサルの遺り残した課題であったからである。従ってこの点でアントニウスの方がアウグストゥス（オクタヴィアヌス）よりもはるかに有利な立場に立っていた。なぜなら彼は東方ローマの指導者としてこの復讐戦をスローガンとしていたからである。ここにおいてアウグストゥス（オクタヴィアヌス）の採った戦術は極めて巧妙であった。前三七年、オクタヴィアヌスとアントニウスとの間にタレントゥム協定が締結され、これによりアントニウスは百二十隻の軍船をオクタヴィアヌスに提供し、一方その代償としてオクタヴィアヌスは陸兵二万をアントニウスに提供することを約束していた。しかしこれは軍船の提供を受けながら軍団兵二万の派遣を事実上無きものとしてアントニウスのパルティア復讐戦に水を差す一方、自

分の姉オクタヴィアをアントニウスから離婚させ、クレオパトラとアントニウスの結合を逆に促進させていく。次いで彼は同僚アントニウスではなくクレオパトラを相手国の指導者とし、自らの戦いを東方の専制支配からローマの自由を守るための聖なる戦いと宣伝していく。⁽⁸⁾

ここにおいてアントニウスとオクタヴィアヌスの立場は完全に逆転しアントニウスはアクティウムで戦う前に宣伝戦で破れていく。勝者オクタヴィアヌスは恥ずべき内戦へとアントニウスを引き入れることなく、自らをローマの自由の擁護者にしていく。ローマの元老院と市民 (SPQR) がアウグストゥスに凱旋門を捧げ彼の偉業を称えたことは言うまでもない。このフォルム・ロマーヌムのほぼ中央部に建てられた凱旋門は今はなく、従って献呈碑文の内容も定かではない。しかしアウグストゥスの『業績録』の中の文言から、それに凱旋門の献堂を受けたことから推察して彼がローマ人の自由の擁護者として讃えられたことは明白である。彼は恥ずべき内戦を闘いつつも宣伝戦に成功し、その戦いを正当な戦い更にそれ以上の聖戦にまで高めていった。彼は属州人からは恩恵者・救済者として讃えられ、属州神殿が女神ローマと彼のために献堂されていく。⁽¹⁰⁾

ではC帝の場合はどうであったか。彼の一連の行動はアウグストゥスのそれと極めて類似している。また四世紀初頭のローマ帝国は共和制末期の状況と極めて類似している。当時のローマ帝国はディオクレティアヌスの四分治制が彼の引退によって正常に機能せず、逆に皇帝の乱立を招いていた。西の最端の属州ブリタニアで三〇六年皇帝に選出されたC帝にとって最初のライバルとなった皇帝は同じく三〇六年イタリアで皇帝に選出されたマクセンティウスであった。彼の名声を

窓 高めた戦いも対ササン朝ペルシア戦のような対外戦ではなく、マクセンティウスとの覇権をめぐる内戦であった。しかもガリアからマクセンティウス支配下のイタリアに入りローマ市を目指すC帝軍には大義名分がなかった。それどころか非はC帝の生命を狙った元西の正帝で

マクセンティウスの父であったマキシミアヌスにあったが、彼の死に対する復讐を主張した息子マクセンティウス側にむしろ正当性があった。この時点でのC帝の立場はかつてのアウグストゥスがアントニウスに対して負わされていたハンディキャップと同じであったと言つてよい。しかし彼は最後の決戦場となるローマ市郊外ミルヴィウス橋の戦いに勝利したさい、自らの戦いを暴君とその一味を撃滅し、ローマ市民を解放する正当な戦いに高めることに成功する。彼もアウグストゥス同様、凱旋門の建設の条件を充たすにはほど遠い内戦の勝利者であった。しかしアウグストゥスの場合と同じく彼もローマの元老院と市民から凱旋門の献堂をうけローマ市の解放者として讃えられていく。⁽¹¹⁾ C帝は内戦を正当な戦いにすることに成功しているがその手腕はアウグストゥスに比べ優るとも劣らぬものと言つてよい。アウグストゥスの覇権の確立はアクティウムの海戦の勝利を契機とするものであった。他方C帝の覇権は対マクセンティウス戦中の最終戦ミルヴィウス橋戦の勝利で確立した。この二つの戦いは動員兵力数、スケールの大きさの点で大きな差があった。かつてのサラミスの海戦のもつ世界的意義・スケールを持つのはアクティウムであり、ミルヴィウス橋の戦いはその比ではない。しかもアクティウムの戦いはサラミスの場合と同じく海戦であった。C帝が自らの内戦にアクティウムに匹敵する意義を与えようとすれば従来のギリシア・ローマ史の常識を破る新

らしい革命的な理念をもって対応しなければならぬ。その上C帝にはアウグストゥスの戦争目的のスローガン形成に役立ったクレオパトラ的人物もいなかった。

ここにおいて重要な意味を持つのはごく最近まで未公認であり、かつ東方の一部に限られていたといえ迫害下におかれていたキリスト教である。しかしこのキリスト教をC帝と結びつけつつC帝の行動を積極的に評価する記述を通常の常識人に期待することは不可能である。例えばミルヴィウス橋の戦いに言及した数少ない四世紀の異教史家エウトロピウスはC帝を一流の優れた皇帝の一人とし、圧制者と見做されたマクセンティウスへの勝利を当然として評価しつつも、その後彼の行動を「尊大」とし彼を二流の皇帝の地位に引き下げている。⁽¹²⁾ 「尊大」の理由についての言及はないがローマの古き伝統・習慣を破壊に導びくC帝のキリスト教的行為への批判というニュアンスがあるようにある。なぜならC帝は三二一年には日曜を聖日とする規定を布告し⁽¹³⁾更に三二五年には剣闘士の競技の禁令を布告しているからである。エウトロピウスがローマ世界の伝統的価値観を根底から揺がすことになるキリスト教的理念に何らの理解を示さなかったことは驚ろくべきことではない。⁽¹⁵⁾

ここにおいてC帝の革命的行為はキリスト教側の証言に求められねばならないであろう。C帝が三二二年十月二十八日のミルヴィウス橋の戦いの勝利を契機として急速にキリスト教に接近していることはキリスト教を公認した三二三年六月のミラノ勅令の布告、三二二年末アフリカで生じた分離派ドナトゥス派運動への介入と一貫したカトリック派への支持⁽¹⁶⁾、そして三二〇年頃から表面化するアリウス派異端紛

争の解決に示した熱意、そしてそれと前後して布告された前述の日曜日聖日の規定(三三二年)、剣闘士競技の禁止規定(三三五年)の布告等から明白である。⁽¹⁷⁾

しかし異端・分離派問題の解決を意図し属州の総督あるいは司教へ宛てた数多くの文書にはミルヴィウス橋の戦いで彼が経験した筈のキリスト教、イエス・キリストとの出逢いに係わる記述は全く見られない。一体ミルヴィウス橋の戦いで何があったのか。周知の如くC帝の改宗伝説として知られる戦いの前日、皇帝が体験したとされる異象についてはラクタンティウス、エウセビオスらキリスト教史家が記している。⁽¹⁸⁾しかし彼らのこの記述から出発することはそれが奇蹟物語とも関連することもあり少し後で採り上ることとし、別な角度からC帝のキリスト教・キリストとの出逢いの問題を考察していきたい。それは三一五年、C帝の即位十周年を記念して献堂されたC帝の凱旋門、そしてこの凱旋門よりも早い時期三三二年末には献堂が公表され⁽¹⁹⁾三一九年末ないし三二〇年一月には完成したとされるラテラーノ教会である。先ずより重要と思われるラテラーノ教会から考察を始めた。

二

C帝がミルヴィウス橋の戦いでマクセンティウス麾下の軍団を破ってローマ市に入城したのは三三二年一〇月二九日であった。このあと彼はローマ滞在中の極めて早い時期に大教会の建設を意図していたようである。当然この教会建設はミルヴィウス橋の戦いの勝利と関連していることが予想される。しかし教会建設に言及した最初の書である五三〇年頃書かれた『教皇の書 Liber Pontificalis』はC帝と同時代

にローマ司教であったシルヴェステルの業績を強調していることもあり、C帝の教会献堂をミルヴィウス橋の戦いとの関連では扱っていない。ここではC帝がシルヴェステル司教の要請を受け殉教者ペテロ、パウロの遺体を埋葬しそこに大教会ペテロ教会(今日のサン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ大聖堂)、パウロ教会(今日のサン・パウロ・フォーリ・レ・ミューラ聖堂)を建設したと記されているが、問題の教会(ラテラーノの地所に建てられたので一応ラテラーノ教会と仮称する。今日のサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂)、ラテラーノ教会の献堂についてはシルヴェステル司教側の要請ではなく、C帝自身の自発的行為であったことを示す文言となっている。⁽²⁰⁾ただし『教皇の書』の著者は前述の如く教会献堂の動機をミルヴィウス橋の戦いの勝利に結びつけていない。彼はそれをキリストと司教シルヴェステルによる病気の癒し(神癒)に対する報恩行為としている。⁽²¹⁾

これに似た記述は伝承の原形は五〇〇年頃とされるが一三世紀になつてウラギネスによって編纂された『黄金伝説 Legenda Aurea』中の「聖シルヴェステル伝」にも見えている。ここでもC帝の教会献堂・キリスト教への接近の動機はミルヴィウス橋の戦いの勝利ではなく彼が煩った病気からの癒し、それもシルヴェステル司教による洗礼に基づく癒しとの係わりから叙述されている。それによるとC帝は病いから癒されたあと罪を告白し「ある教会の建設予定地に最初の鋳入れをし、十二籠分の土を自ら運んだ」とある。⁽²²⁾「ある教会」がラテラーノ教会であることは言うまでもない。この文脈から言うと献堂予定地はC帝の決断前に既に決定していたこと、つまり献堂はシルヴェステルとC帝との共同事業であったという印象を与える。

この二つの文献、『教皇の書』そして『黄金伝説』中のシルヴェステル伝にはフィクション部分がかかり含まれている。C帝の病氣（それはレプラであったとされる）は彼が行なったキリスト教徒迫害に対する刑罰であるとする部分はその典型である。しかしこの「聖シルヴェステル伝」には重要な記述が確認される。それはペテロ、パウロ教会が殉教者教会でありシルヴェステル司教の要請でC帝が献堂しているのに対し、ラテラーノ教会は司教との係りはあるにせよ（ただしこの場合の司教はシルヴェステルの前任者ミルティアードスも含まれる）C帝自身の意志で献堂がなされている事、そしてこのラテラーノ教会がペテロ、パウロ教会とは異なり殉教者に捧げられたものではないということである。

では一体、この教会は誰に捧げられたのであろうか。ここで脚光を受けるのがラクタンティウス、エウセビオスの記述に見えるミルヴィウス橋の戦いに先立つ時点でC帝が体験したとされる異象のことである。先ずラクタンティウスの『迫害者の死』の記述に従ってそれを追跡してみよう。それによると戦いに先立つ三十二年十月二十七日はマクセンティウスの即位五周年の記念日であり、記念の競技会が開催されていた。その時「C帝を打ち負かすことは出来ない」という群衆の叫びに動揺し彼はシビュラの托宣を指令する。その回答は「その日、ローマ人の敵は抹殺されるであらう」と言うものであった。そこで勇氣を得た彼は出陣を決意し、ティベル河を渡って背水の陣を敷き戦闘に入る。一方C帝は同じ二十七日、眠りの中で「神の印を盾の上につけ、戦闘に入るように」との指示を神から受ける。彼は命ぜられた通りこのことを実行して「X」の文字を斜めにしその上端を折り曲げて盾の

上にキリスト ΧΡΙΣΤΟΣ の文字十を取りつけ、マクセンティウス軍を破った。マクセンティウスとその部下は自らが破壊した橋の方へ押し戻されティベル河に落ち溺死した……と。⁽²³⁾

ではエウセビウスはこの状況をどのように描いているのであろうか。早い時期（三一五年頃）に書かれた『教会史』にはラクタンティウスの言う夢の中の体験とキリストの組合文字を盾の印にする、とい記述は見えていない。⁽²⁴⁾しかしC帝の死後に書かれた『コンスタンティヌスの生涯』にはそれが見えている。それによると、戦闘に先立って神キリストを守護神として祈ると神の印が天に現われ、C帝は「天高く太陽の上方に光から成る十字架の印を見、汝これにて勝て、との文字が記してあるのを見た」こと、その日の夜、再び現われたキリストの指示に従いC帝が槍を利用した旗竿の先端にキリスト ΧΡΙΣΤΟΣ の最初の二文字 ΧΡ の組合文字（✠）をつけ更に自分のヘルメットの正面にもこの印をつけたこと等が記されている。⁽²⁵⁾

ラクタンティウスとエウセビウスの記述には若干の差異がある。キリストの組合文字の形の上の差（ラクタンティウスの場合には十、エウセビウスの場合は✠）、及びキリストの方からC帝に語りかけたとするラクタンティウスの記述、C帝の方からキリストに呼びかけたとするエウセビウスの記述の差である。しかし両者ともC帝が戦闘にさいしキリストの助けをうけ、キリストの印を盾印・旗印として導入し勝利した、という点では共通している。このあたりの記述はほぼ真実と見てよいであろう。多くの研究者もこの点では一致している。しかしエウセビウスが記す「太陽の上に光り輝く十字架と、汝これにて勝て、との文字があった」の部分はこれを裏付ける三一五年鑄造の記念

メダルの図柄があり、またエウセビウスがこの話をC帝から直接聞いたものとしているがフィクションという感が強い。

ここで話を元に戻したい。この章の主題はC帝がローマ市入城後の早い時点で自らの意志でラテラーノ教会の献堂を思い立った動機は何か、またそれは誰に捧げられたものであったかということである。この回答は前述の二人の教会側の作家の記述から今や明白となった。教会はミルヴィウス橋の戦いのさい勝利を与えてくれた、とC帝が確信するイエス・キリストに捧げられたということである。残念ながら二人の作家はペテロ、パウロに捧げられた教会を含めこのラテラーノ教会の献堂についても言及していない。しかしこの教会の最も古い呼称が『教皇の書』ではコンスタンティヌスのバシリカ、碑文では救世主のバシリカ(Basilica Salvatoris)⁽²⁸⁾であったことに注意したい。このキリストに捧げる教会というC帝の発想は極めてユニークであり通常の常識を越えた発想であると言える。聖書によれば「二・三人キリストの名において集る所、そこにキリストは在る」⁽²⁹⁾とされている。とすれば大小を問わず全ての教会にキリストは遍在する筈であり、従ってイエス・キリスト自身に捧げられた教会という発想は取り得ないことになる。ローマ司教シルヴェステルはむろんそのことを知っていた。しかしC帝はあえてイエス・キリストに教会それも教会第一号を捧げている。このC帝に見られる大胆な常識を越える行為はその直前まで未信者でありキリスト教について無知な皇帝にして始めて可能となる発想であったと考えられる。C帝のキリスト教への帰依はマクセンティウスとの戦いの中でなされたものであった。この点で彼がこのキリストに捧げた教会の建設をマクセンティウス軍の中枢を構成した

近衛騎兵隊の営舎を利用していることは極めて象徴的である。⁽³⁰⁾ C帝のこの行為は完成を急ぐため営舎の土台、壁の利用という実用的側面もあったが、それはマクセンティウスと彼を支えた軍団に対するキリストとC帝の勝利を公示する行動であったともいえるからである。時代はやや下るが三二七年鑄造の貨幣には蛇を突き刺すキリストの組合文字を先端に持つ軍旗が描かれているが、これはかつてローマ世界で強大な力を誇示していた近衛騎兵とその営舎の上に立つイエス・キリストとC帝の姿を象徴するラテラーノ教会の位置を示すものとも言える。

以上やや長きにわたってラテラーノ教会献堂のプロセス、その意義等について述べたがC帝はキリストとキリスト教という新しい宗教・宗教理念を導入することによって本来ならば単なる覇権争いとしての対マクセンティウス戦に革命的意義を付与し、不名誉な恥ずべき内戦を正当化し更にそれを聖なる戦いに高めることに成功した。彼が捧げた「救世主のバシリカ Basilica Salvatoris」が数千名の信者の収容を可能にする巨大な教会であったことは、当時のローマ市の信者の数の多さを示すというより、万軍の主であり、従ってどの異教神殿にも引けをとらぬ聖所を持つべきであるとするC帝の独自の発想に由来するものと考えてよいであろう。救世主イエス・キリストに捧げられたこの教会はC帝のキリスト教との結合を示す最も雄大で可視的な建築物であったのである。最近の考古学上の調査によると十六世紀まではほぼ原形を留めていたこの教会は一つの中央の身廊、その左右二列の側廊、計五列の廊をもつ幅五六米、後陣を含む奥行約百米を越える雄大な建物であったと言⁽³¹⁾う。それはローマ市最大の異教神殿である万神

窓 殿 Pantheon の幅・奥行き・高さ四三・三米をはるかに凌駕してい

史 る。またパンテオンが直径八米の明り取り一個を持つ建物であったの

に対し「救世主のパンシカ」は三層から成る左右の外側の壁の部分だ

けでなく半円形の後陣部分それに正面部分にも広い採光用の窓をもつ

宮殿・議事堂・裁判所などと同じ構造をもつパンシカ様式の建物であ

った。⁽³⁴⁾（ローマ人は板ガラスを作る技術を持っていた。）それは従来

の信者集団のみを対象とする神殿とは異なる公共的性格の強い建物で

あった。彼はこの建物を介して自らの体験を公けにする過程で自らの

ありふれた覇権闘争を正当な戦い、更に聖なる戦いにまで高め、戦い

に普遍的意義を与えたのであった。ラテラーノ教会が「ローマ市と世

界の全教会の母にして首^{caput} omnium ecclesiarum urbis et orbis mater

et caput」のタイトルを持っていることに留意すべきである。⁽³⁵⁾

ラテラーノ教会についてはこの程度にし、次にこの教会と同様C帝

が自身のキリストとの結びつきを公けにする目的で建立を促がしたと

考えられる凱旋門について考察していきたい。

三

C 帝の凱旋門はそれに隣接して建つティトゥスの凱旋門そしてフォ

ールム・ロマーヌムの西端近くに建つセプティミウス・セヴェルスの

凱旋門と共に今日もほぼ建設当初の姿を残している。その建設は三一

五年であり三つの中で一番新しい。しかしローマ帝国の再建期とはい

え既に頂点を越え衰退に向いつつある時代の建築であり、またC帝の

治政十周年に間に合わせたこともあり、壁面を飾る大理石のレリーフ

の多くは他の建物からの借用・盗用⁽³⁶⁾であり、この点で建設者の意志が

十分に現わされていないという欠陥がある。例えば南・北両正面の壁

面を飾る狩猟のシーン、豊かな獲物に対する感謝のシーンを示す八コ

の円形レリーフ（アーチ・図③から⑤）はハドリアヌス帝になるもの

である。同じく南・北両正面の最上部を飾る八個の長方形のレリーフ

（アーチ・図1から8）はマルクス・アウレリウスに係るもので、そ

こでは皇帝の兵士への訓辞・敗北者の帰順・勝利の祭儀等の場面が見

える。レリーフのハドリアヌス帝、M・アウレリウス帝の頭部はC帝

のそれに改変されたようであるが、その部分は破損が大きく明確では

ない。今日、明確にC帝と判明するM・アウレリウスに係る部分は教

皇クレメンヌ十二世による一七三二年の修復である。この南北両正面

のレリーフがハドリアヌスとM・アウレリウスに係るものであるのに

対し、西・東の両側面最上層及び主門の内側左右壁面を飾る長方形大

型のレリーフ四個はトラヤヌスに係るものでありいずれも戦闘のシー

ンとなっている。（アーチ・図①から④）ここでも破損のため明確で

はないがトラヤヌスの頭部はC帝のそれに修正されているようであ

る。

C 帝の凱旋門は元来C帝が対立皇帝マクセンティウスを破ってロー

マ市に入城した三二二年十月二十九日以降に建設が決定され、三一五

年の治世十周年に間に合わせるため突貫工事で完成されたものではあ

る。前述の壁面を飾る大理石レリーフの借用・盗用もさることながら

凱旋門の土台自体も二世紀のもの借用であったことが発掘調査の結果

明らかとなっている。⁽³⁷⁾従ってC帝のキリスト教的態度を考察するに

あたって借用部分のレリーフについては特にこだわる必要はないと考

える。この点欧米の研究者は伝統的にレリーフ全体をC帝の意志の表

明と見做し、借用部分とC帝独自の部分を同質的に扱いつつC帝の宗教的態度を判断しようとする。当然ながらそこから導入される結論はC帝のキリスト教的立場の曖昧さ、異教からの離脱の不十分さということになっていく。むしろ最近の発掘調査に基づく情報の増加もありC帝のキリスト教との結合を積極的に認めようとする人が増えつつあることは事実である。しかし凱旋門全体の考察から導入される結論は異教からキリスト教へ移行する過渡期の姿を示すものということである⁽³⁸⁾。私はこのような立場を離れC帝自身の時代に属するレリーフを中心に彼の動向をとらえていきたい。

C帝が戦った主な戦争は冒頭の部分で触れた如く対ササン朝ペルシア戦のような雄大な対外戦ではなかった。彼が戦い結果的に彼を有名にし、凱旋門の建設を可能にした戦いは対マクセンティウス戦であった。C帝の凱旋門の中段部分の幅は一・二米と比較的狭いが門を出入りする人々の一番目につき易い部分に置かれたレリーフがその光景をビビットに示してくれる。それは西側面に始まり南正面に移り次いで東側面そして北正面に至る長大なレリーフである(アーチ・図斜線部分①から⑥)。先ず西側面のレリーフ①から始める。この場面はガラアからマクセンティウス支配下のイタリアに入り、無血開城させたミラノを出発しマクセンティウスの防衛都市ヴェローナに向う行軍のシーンである。ラッパ手、旗手を先頭に物資補給担当将校の姿が確認される。第二のシーンは南正面左側に見えるがここではヴェローナ市攻撃が主題である。②C帝は馬から降り歩兵と行動を共にしている。その頭の部分だけ高くされているC帝の背後にあつて王冠を手にし空中を飛揚しているのは女神ヴィクトリアである。前方には奮戦中の兵士

の姿が見える。一人の勇敢な兵士が城壁に接近し攻撃の機会をうかがっている。つづく南正面右側の部分③は戦闘のクライマックスであるミルヴィウス橋の戦いの情況の部分である(図版参照)。橋を壊し舟橋を仮設したあと背水の陣で戦いに臨んだマクセンティウスとその部下達は敗北し、舟橋を渡ることに失敗しティベル河で溺死する。この部分のシーンが一連のレリーフの中心部分である。身につけている鎧の重みで苦しむ兵士はその装備から判断して騎兵それも近衛騎兵であろう。彼らこそマクセンティウス軍の中核を構成する軍隊であった。

戦闘のシーンはここで終了し、つづく東側面の部分④はローマ市への入城の場面である。ここではC帝は馬車に座乗している。最後の場面は北正面のレリーフに見えるが左側⑤にはローマ広場の演壇上から演説するC帝の姿が見え、そして右側⑥ではC帝の慈善行為に関する光景が示されている。以上がミルヴィウス橋の戦いを中心とするC帝の一連の行動の記録であるが、これは日数に換算すると旬日を出ない期間内の出来事であった。この事はC帝にとって決定的に重要であった戦いはこのミルヴィウス橋の決戦に あつたことを示すものと言ってよい。この間の事情は今も原形を残している南・北西正面の中央上段部の碑文に照しても明らかである。碑文はローマの元老院と市民がC帝に勝利の凱旋門を献呈したのは彼が「神性の靈感と精神の偉大さにより、自らの軍隊をもって武力で暴君とその全ての一味から一瞬にして正義へと国家を救済したが故に⁽³⁹⁾」となっている。元老院と市民が捧げた凱旋門は「勝利の印 [triumphis insigne]」としてであったが、その勝利とは言うまでもなくマクセンティウスへの勝利、ミルヴィウス橋の戦いの勝利であった。

ここで重要なのはこのマクセンティウスへの勝利をC帝がキリストの助力によるものと確信し、その恩義に報いたいと熱望していることである。彼のこの願望は既に言及した「救世主のバシリカ」、ラテラーノ教会の献堂で一応達成していた。しかしC帝にとってそれだけではなお不十分であった。ここにおいてそれを補なうものとして意味をもつのが凱旋門であった。凱旋門の建設もまたキリストへの報恩行為として理解されねばならない。むしろ凱旋門にはC帝の守護神となつたキリストに言及した文言もないし像もない。これはC帝のキリストとの出合いの事は知っていたとしても典型的な伝統主義者集団である元老院のメンバーには到底出来ぬ行為であつたであらう。⁽⁴⁰⁾ガレリウスの寛容令が布告されたのはわずか一年前の三一年であつた。C帝もこの間の事情を十分に認識していた筈である。彼は元老院と市民に譲歩している。しかし元老院と市民もそれ以上に譲歩を求められている。彼らは碑文の中に伝統的神々の名を挙げていない。それどころか「神性 *divinias*」というヘブライ的最高存在者を連想させる文言を刻んでいる。⁽⁴¹⁾我々はC帝のキリスト教的行動については彼が何をしなかつたか、何が彼に欠けていたか、ではなく、彼が何をなしたか、という点に重点を置いて考察すべきである。このように考えると凱旋門が存在していること、そしてそこに「神性の靈感」によってC帝が勝利者となつたという文字が刻まれていること自体が大きな意味を持つと考える。それは見栄えのしない内戦をキリストとキリスト教の導入によって革命的行為に高めようとしたC帝の大胆にして成功を見た偉業であつた。⁽⁴²⁾

この章を終えるにあたり凱旋門のレリーフについていま一つ追加し

たい。それは対マクセンティウス戦のレリーフと同じくC帝期に属するとされる西側面と東側面を飾る円形の月神と太陽神のレリーフである。このレリーフについては四頭立ての馬車に乗り上昇する太陽神をC帝に、一方、海に向つて下降する二頭立ての馬車をあやつる月神をマクセンティウスにあてる研究者がいる。⁽⁴³⁾しかし輝く太陽としてのキリストという発想が四世紀のローマ世界に広く流布していたことを考えるとキリストを暗示する像ともとれなくはない。むしろ確証はないが凱旋門の主題が対マクセンティウス戦であり、その戦いに勝利を与えた神がイエス・キリスト自身であつたと信ずるC帝にとってキリストを暗示する像があつても不自然ではないであらう。しかもC帝にとつてそのキリストは万軍の王、力の優れた救世主でなければならぬ。⁽⁴⁴⁾C帝にとってパウロ流の人類の罪を瀆りキリストという受けとめ方は稀薄である。C帝にとって凱旋門はラテラーノ教会と同じく自らのキリストとの結びつきを公けにする目的をもつた建物であつたと言つてよいであらう。

結 語

世界のカトリック教徒にとって最も重要な教会はヴァティカン市国にあるサン・ピエトロ大聖堂、ローマ市にあるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂、サンタ・マリア・マジョーレ聖堂そしてサン・パウロ・フオリ・レ・ムーラ聖堂である。⁽⁴⁵⁾中でも最初の二つ、サン・ピエトロ大聖堂とサン・ジョヴァンニ聖堂は献堂がC帝の治世になされている点で特筆されねばならない。しかしこの二つの聖堂の間には大きな差異があつた。ピエトロ聖堂は殉教者ピエトロ(ペテロ)

に捧げられたものであり、当時のローマ司教シルヴェステルの要請でC帝が献堂したものであった。これに対し通常ラテラーノ教会の名で呼ばれるサン・ジョヴァンニ(ヨハネ)教会はC帝自身の願望で献堂されたものであり、しかも献堂の対象はイエス・キリスト自身に対してであった。このキリスト自身に対し捧げる教会という発想は正に常識を破るものであるが、それだけにこれはC帝のキリストとの出会い、彼のキリスト観の性格を示しており、同時に彼のキリスト教受容の姿を特徴づけている、と言ってよいであろう。マクセンティウスとの戦いを前にして彼は幻を見たというが、彼はこの体験を積極的に受けとめ、キリストを守護神として戦い勝利した。彼にとってキリストは万軍の王、力強き神であった。このようなキリストの理解は旧約的であり不当である、という批判を下す資格は我々にはないであろう。彼はキリスト教を精神的武器とすることで、ありふれた覇権闘争を宗教化し、アウグストゥス同様、否それ以上に自らの戦いを正当化した。元老院とローマ市民に自らが解放者であることを示すことに成功した。凱旋門の碑文・レリーフに見られる中立的・非キリスト教的要素はC帝の元老院と市民に対する譲歩であった。しかしC帝はそれ以上の譲歩を元老院側に認めさせることに成功している。凱旋門自体の献堂を彼らに認めさせ、更に碑文の中に「神性の靈感」の語を記させたことはそのことを端的に示している。この神性 *divinitas* は三二三年布告のミラノ勅令、更にC帝が分離派ドナートゥス派への対応の書簡の中でも出てくる語であり異教的というよりむしろ一神的ヘブライの理念を連想させるものである。凱旋門も又ラテラーノ教会と同じくC帝の勝利・キリストの勝利を示す建物という性格を持っているとい

てよいであろう。C帝は第十三番目の使徒という自覚の下に自らが新首都コンスタンティノープルに献堂した使徒教会に埋葬された。キリスト教徒としてのC帝にはイエス・キリストの直弟子という自覚があったと考えられるがそれは復活のイエス・キリストに出会い、回心したとされるパウロと同じ体験を持ったC帝にして始めて可能となったものであったといえよう。それはローマ司教シルヴェステルには許されぬ越権的行為であった。C帝が迫害者の地位に追いやられた理由の一端はこの辺にあったと考えられる。しかしこの問題は本論考の枠を越えている。一先ずここで擱筆したい。

註

- (1) Liber Pontificalis 34 Silvester (31.1.314-31.12.335) the Book of Pontiffs, translated with an introduction by Raymond Davis, Liverpool University Press 1989 pp.14-26.
- (2) *ibid.*, pp.14-16.
- (3) Eusebius, *Vita Constantini*, III 41, 43, 50.
- (4) H. A. Pohlsander, *the Emperor Constantine*, Routledge, London and New York 1996, p.34. J. Curran, *Pagan City and Christian Capital—Rome in the Fourth Century*, Oxford Classical Monographs 2000, pp.93-99, 105-115.
- (5) *ibid.*, pp. 94-95.
- (6) E. Gibbon, *the History of the Decline and Fall of the Roman Empire* vol. I (Penguin Classics) Chap. 3, p. 103.
- (7) 拙稿「ヘブライ人・ギリシア人の戦争観とその修正者ローマ人——「ローマの平和」に関する考察——」就美女子大学史学論集一四、平成一一・一一、A. Demandt, *der Idealstraar—die politischen Theorien der Antike*, 1993. Böhlau, Köln Weimar Wien ss. 247-265. Trever Cairns, *I romani e il loro imperio—introduzione alla Storia*

- dell'umanita 2. Editori Rizzatti Cambridge U.P. 1979. pp. 15-17.
- (8) H. Volkmann, Cleopatra—A Study in Politics and Propaganda translated by T. J. Cadoux. 1958. p. 137. 引も渡した点は「割二十各だけであった。」
- (9) *ibid.*, p. 170. 浅香山『クレオパトラとその時代—ローマ共和政の崩壊』創元新書32 一九七四年、一七二—三三頁。
- (10) 拙稿「ローマ帝国の州分寺」角田文衛篇、『新修國分寺の研究』第六巻『総括』吉川弘文堂、平成八年三月、所収、三三三—三三九頁。
- (11) 凱旋記のメインテーマ左右の壁面と Liberatori Urbis, Fundatori Quietis「市の解放者く、平和の創設者く」の文字が刻まれている。
L. Voelkl, der Kaiser Konstantin—Annalen einer Zeitenwende 306-337. Prestel Verlag, München 1957, 図版36・15
- (12) Eutropii Breviarum ab Urbe condita, Kurze Geschichte Roms seit Gründung, Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1995, X, 7 ss. 142-145.
- Eutropius, Breviarum translated with an introduction and Commentary by H. W. Bird, Liverpool U.P. 1973, book 10, 7, p. 16.
- (13) Codex Theodosianus 2. 8. 1 (321 AD)
- (14) C. T. 15. 12. 1 (325 AD)
- (15) 彼のローマ史概要はヨヴァヌスの治世(三二三—三三四年)にまで及んでいる。しかしキリスト教への言及はユリアヌスのキリスト教迫害だけに止まっている。
- (16) 拙稿「ドナティスム運動に関する一考察—セクト運動の性格と意義」昭和四十二年七月、『西洋史学』七〇、六九—九二ページ。
- (17) 拙稿「コンスタンティヌスの改宗—その時期と動機をめぐる問題」昭和三十七年四月、『西洋史学』五三、一五—三二ページ。
- (18) Lactantius, de Moribus Persecutorum 44, 1-9, Eusebius, Historia Ecclesiastica IX. 9. 1-5, Eusebius, Vita Constantini I. 27-32.
- (19) 三三二年十一月九日が想定されている。出典は十二世紀の書 descriptio Ecclesiae Lateranensis 中の Quinto idus Nov. Romae dedicatio basilicae Salvatoris である。J. Curran, op. cit., pp. 94-95.
- (20) Liber Pontificalis Silvester, p. 16.
- (21) *ibid.*
- (22) J. A. Voragine, Legenda aurea 12. S. Silvester 邦訳、前田・今村訳『黄金伝説』1、人文書院、一九八七年、一六八—一七一ページ。
- (23) Lactantius, de moribus persecutorum 44, 1-9, テキストとしてではなく、次のものを使用した。
Text zur Forschung 54, Quellensammlung zur Religionspolitik Konstantins des Grossen, übersetzt und herausgegeben von Volkmar Keil, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1989 ss. 42-44.
- (24) Eusebius, h. e. IX. 9. 1-5 V. Keil, *ibid.*, ss. 44-46. 以下では「彼を祈りを介して天上の神とそのロコス、万人の救世主でもあるイヌス・キリストを同盟者として要請した。次いで彼は全軍隊と共に進軍し、先祖から受け継がれてきた自由をローマ人のために復活させようとした」とあり、続いてマクセンティウスとその兵士の溺死の模様をモーセに率いられた民を追跡したマラオとその兵士達が紅海で溺死した故事になぞらえている。
- (25) Eusebius, V. C. I. 27-32, esp. 28-30. V. Keil, *ibid.*, ss. 46-52, esp. ss. 50-51.
- (26) 三二五年の記念メダル
- (27) Eusebius, V. C. I. 28. 1. op. cit., ss. 48-49.

- (28) *descriptio Ecclesiae Lateranensis*, J. Curran, op. cit., pp. 94-95.
 (29) 新約聖書マタイ伝一八・二〇。なおエペソ人の書簡一・二三には「教会はキリストの体身、キリストの充満している所」とある。
 (30)

縦長の部分が兵舎、上中央の正方形の建物は司令部。教会は近衛隊営舎の基礎の上に位置している。

(31)

- (32) Charles Matson Odahl, *Constantine and the Christian Empire*, Routledge, London and New York 2004, p. 151.
 (33) *ibid.*, p. 151, Ross Holloway, *Constantine and Rome*, Yale U. P., New Haven and London 2004, pp. 58-59, J. Curran, op. cit., p. 96.

コンスタンティヌス時代のラテラーノ聖堂（復元図）

広い窓が多くとられている。教会内の陽光の効果は極めて大であった。

R. Holloway, op. cit., pp. 60-61

- (34) R. Holloway, *ibid.*, pp. 60-61.
- (35) 新約聖書『コロサイ人への書簡』一・一八には「キリストは教会といふ身体之首 *caput corporis ecclesiae*」である。ラテラーノ教会の別格の地位を示すタイトルである。
- (36) R. Holloway, *ibid.*, p. 21 Spila ノートの敘文は同書に従う。
- (37) *ibid.*, pp. 51-52.
- (38) *ibid.*, pp. 52-53.
- (39) *Quod instinctu divinitatis mentis magnitudine cum exercitu suo tam de tyranno quam de omni eius factione uno tempore justis rempublicam ultus est armis arcem triumphis insignem cavavit.*
- (40) cf. J. Curran, *op. cit.*, p. 87.
- (41) ホルスタット、この語はひじく新プラトン哲学的思考に類似する。しかし同時にキリストの「神教」権をひびく概念である。E. Horst, *Konstantin der Grosse — eine Biographie*, classen 1984 s. 168.
- (42) C. M. Odahl は最高の神性やキリスト教的神性への「神」の神の立場を「元老院から承継した」としている。 *op. cit.*, p. 142.
- (43) C. M. Odahl, *op. cit.*, p. 142.
- (44) Eusebios h. e. IX. 9. 2, Keil *op. cit.*, ss. 44-45, V. C. I. 27-2, Keil, *op. cit.*, ss. 46-47.
- (45) 『文化遺産』一七号、浅香山監修「特集ローマ古寺巡礼」島根県並河萬里写真財団、創英社、平成十六年。
- (46) 例えばローマ司教シメオンの「神」の神の書簡には「全能の神の神性」 *ἡ θεότης τοῦ μετὰ τοῦ θεοῦ divinitas dei magni* の語が見える。 *ibid.* Eusebios h. e. X. 5. 20, Keil, *op. cit.*, ss. 74-75.